

第34回大分県「小さな親切」作文コンクール 廣岡亮輝さん(安岐中3年)が県知事賞を受賞

第34回大分県「小さな親切」作文コンクール中学生の部で、最優秀賞の県知事賞に廣岡亮輝さん(安岐中3年)の「僕に足りないもの」が選ばれました。また、全日本「小さな親切」作文コンクールでも優秀賞に選ばれました。なお、市内関係者の入賞者は次のとおりです。(敬称略)

●小学生の部

大分県教育委員長賞 田中 友梨(国東小6年) 大分県教育長賞 渡邊 巨也(国東小1年)

●中学生の部

大分県知事賞 廣岡 亮輝(安岐中3年) 大分県教育委員長賞 高原 早紀(安岐中3年)
大分県本部長賞 若杉 果林(安岐中1年) 大分県本部優良賞 平塚 直人(安岐中1年)

「僕に足りないもの」(原文のまま)

安岐中3年 廣岡 亮輝



祖父の三回忌、法要が終わって帰るとき、お寺の本堂からはものすごく急な坂道が続いていた。祖父の親せきは皆高齢者が多い中、デイサービスに勤めていた母が、一人のおばさんに手をさしのべ、一緒に階段を下り始めた。

「亮輝も手を取ってあげよ。」母の言葉で、僕は咄嗟に不安げに階段を下りているおばさんの手を取って、階段を下りていった。「ああ、すいません。ありがとう。」

下りている途中、おばさんからそう言われた。日頃、「ありがとう」なんて言われたことがなかった僕にとって、それはとても新鮮で、何だか心が温かくなっていくのがわかった。ただ母に言われて何気ない気持ちでとった行動が、今思えば相手も自分も幸せな気持ちにさせていたことに、僕はこの行動のすごさを感じた。と同時に、自分に対する悔しさも込み上げてきた。

それはある休みの日、電車で出かけたときのことだ。僕の近くに、白髪の疲れた表情をした婦人が乗ってきた。僕は「あ、どうしよう。席替わろうかなあ、声をかけるのは恥ずかしいなあ、どうしようかなあ……」と自分の中でちゅうちょしていると、僕の目の前に座ってい

た三十代のサラリーマン風の男性が、「あ、どうぞ。」とその婦人に席をゆずっていた。その婦人の顔を見ると、辛そうだった表情が和らいでいくのがわかった。

この日の出来事を今思うと、どうして色々考えてすぐ行動に移せなかったのだろう、ととても後悔している。ずっと席をゆずれなかった自分が恥ずかしい。

「親切ってあたり前のことをやるだけやん。特別なことじゃないし、恥ずかしいことでもない。人に無関心な人が多くなってきているけど、自分にしてくれて嬉しいことは人にもしてあげんとな。普通のことだと思うけどな…。「親切って何?」と、母に聞いた母の答えだ。だから、母は法要の日、自然に手をさしのべられたのだと思う。僕には何が足りないのだろうか。ちょっとの勇気なのかもしれない。そのちょっとの勇気が出せたら、親切というものが、母のように当たり前のことに近づいていけると思う。

僕は今まで親切について、こんなことをすればこの人はこう思うだろうかとか、喜ばれるためにどんなことをしようとか頭の中で考えすぎて、心からの親切を忘れていた。親切をしようと思ってするのはではなく、日常生活の中で自然に手をさしのべられるような人間に、僕は成長したい。そして、僕が人から親切を受けたら、みんなの心が温かくなる魔法の言葉を素直に言える人間にもなりたい。

国見町赤根区の安心・安全(緊急)カードの取り組み

国見町赤根区(河野英雄区長)では、緊急時に迅速な対応ができるようにと昨年の7月から全区民を対象に安心・安全(緊急)カードを配布しています。

カードに記入する内容については、消防職員OBや市民病院などと相談し、救急医療の従事者がどのような内容を必要としているのかを調査し、現在のカードを作成しました。

必要事項(氏名、住所、生年月日、血液型、病歴、かかりつけの病院、服用薬、緊急時連絡先)を記入したカードは専用の封筒に入れ、冷蔵庫に貼

た状態で備えることとし、事前に消防署や医療機関に区の取り組みとして報告しています。

地区の高齢者からは、この取り組みのおかげで毎日をお過ごしできるといふ喜びの声が上がっています。

